

環境

✉ kankyo@asahi.com

持続可能な開発へ

「新たな指標必要」

「国連環境開発会議」（地球サミット）から20年。ブラジルで6月に開催される「国連持続可能な開発会議」（リオ+20）では今後10年の経済・社会・環境のあり方が議論される。リオ+20で期待される成果や日本の役割は何か。途上国支援で中心的な役割を果たす国連開発計画（UNDP）のレベッカ・グリンズパン副総裁（国連事務次長）が朝日新聞のインタビューに応じた。

——この20年で世界はどう変わったか。

一つは、地球温暖化や生態系破壊など世界が危機に直面している科学的エビデンス（証拠）が集まり、広く一般にも受け入れられるようになった。早急に現実的な対応を取るべきだという考え方が科学界で主流になり、世論全体としても合意事項になった。

二つ目はグローバルな市

国連開発計画 グリンズパン副総裁インタビュー



住宅大臣などを歴任し、94年から98年まで副大統領。06年から国連事務次長補兼ラテンアメリカ・カリブ局長。10年2月より現職。

民社会の登場。国際的なネットワークを持たない組織や個人であっても、フェイスブックやツイッターなどの新しい通信手段を通じて国際的な議論に参加できるようになった。市民の声の民主化だ。三つ目は、人口爆発や資源枯渇、貧困など地球規模の問題がもはや先進国や途上国に限ったものではなく、双方が一体となって解決すべきだと認識されるようになったことだ。

——持続可能な開発はどうすればできるか。

20年前には経済、社会、環境の各分野でそれぞれの取り組みが大事だという認

識だった。リオ+20では、3分野をよりよく融合させることが将来に向けた突破口になるという考え方が有力になっている。GDP（国内総生産）に表れないような価値を測定し、指標として制度化することも重要だ。我々は、リオ+20でこの分野で中心的な役割を果たしたい。

——日本の国際貢献についてどうみるか。

途上国支援や低炭素技術などで大きな貢献をしてきた。金融危機や東日本大震災後の非常な困難なときでも公約を守り続ける姿勢は、国連としても一個人と

しても心から称賛したい。途上国と途上国をつなぐ「三角協力」や、温暖化の影響を最も受けやすい小島嶼国への支援などもリーダーシップを取ってきた。日本が世界にアピールできる分野だ。

——海外支援よりも国内の格差是正などを優先すべきだとの声も強い。

日本だけの問題ではない。UNDPの役目は、自国の貢献がいかにか世界の貧しい国々の助けになっているか、政府が国民に成果を示す手伝いをしていくことだろう。地球温暖化など地球規模の課題は先送りできない。良いことも悪いことも我々は共有していることを忘れないようにしたい。

（聞き手・小林哲）

◇

グリンズパン氏は、15日に東京で開かれた国際会議「東アジア低炭素成長パートナーシップ対話」に出席するため来日した。